

## 日本一のモグラ駅

神村ふじを

もう10年以上前になるが、谷川岳の紅葉を見に行ったことがあった。谷川岳は、上越国境の三国山脈に位置し、ロッククライミングの聖地であることや、群を抜いて遭難者が多いことから、「魔の山」としてのイメージが強く、気軽に紅葉見物とはいかない感じのだが、ハイキング感覚のまま、途中の天神峠までロープウェイとリフトを乗り継いで行けるので、そこから見る連峰の山々の紅葉はまさに絶景の極みである。

谷川岳の北に位置する清水峠を越えれば、川端康成の「雪国」の舞台である越後湯沢ということもあって、この山や周辺の峠などに何となく不思議な魅力を感じていたのである。

上越国境を跨ぐ清水トンネルができる前の東京と新潟を結ぶ鉄道は、高崎から碓氷峠を越えて長野から直江津経由となっていたため、東京、高崎から直接新潟へは行くことができなかった。高崎からの上信国境には、「木曾の<sup>かけはし</sup> 棧太田の渡し碓氷峠がなくばよい」と謳われた難所の碓氷峠があ

り、東京と新潟の往来は非常に不便であった。

清水トンネルは、1922年（大正11）8月着工、31年（昭和6）3月に完成。急勾配のためループ式という螺旋状に勾配を大きく回る線路が敷設されたことや、10キロメートルほどの長大なトンネルのため、工事期間は約9年間、関連工事を含めて殉職者は実に48人に上った。

川端が越後湯沢を訪れたのは、34年（昭和9）6月。上越線が全通して3年後のことである。この清水トンネルを越えてあの有名な冒頭の一節、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」が生まれたのである。

この上越線も、現在は複線化されて、上り線（高崎方面）に先ほどの清水トンネルが、下り線（新潟方面）には67年（昭和42）完成の新清水トンネルが使用されている。つまり、川端が旅した線路は現在の上り線になっており、川端と同じような経路を辿って東京方面から越後湯沢へ向かうことはできなくなった。

上越線の土合駅は、群馬県最北端にあり、谷川連峰への登山やトレッキングの拠点駅となっている。この土合駅はとても変わった構造になっていて、というのも前述した清水トンネル、新清水トンネルのお陰で、土合駅の地上駅舎には上り線ホームがある。下り線ホームは地下約70メートルの新清水トンネル内にあり、462段の長い階段を下りないと下り列車に乗れない。だから、「日本一のモグラ駅」と呼ばれている。



JR 上越線 土合駅



土合駅下り線ホームへの入り口

階段の脇を結構な量の地下水が流れており、薄暗い階段を上り下りするため、まさにモグラになった気分である。

この階段は相当にきつい。上っても上ってもなかなか地上に辿り着かない。途中で嫌になるほどの高低差だが、これが日本一のモグラ駅の魅力でもある。

エスカレーター設置の計画もあると聞いたが、そうなれば、モグラ駅の魅力は半減するに違いない。鉄道ファンならずとも一度は訪れてみたい駅である。

地下駅を出で国境の空澄めり ふじを